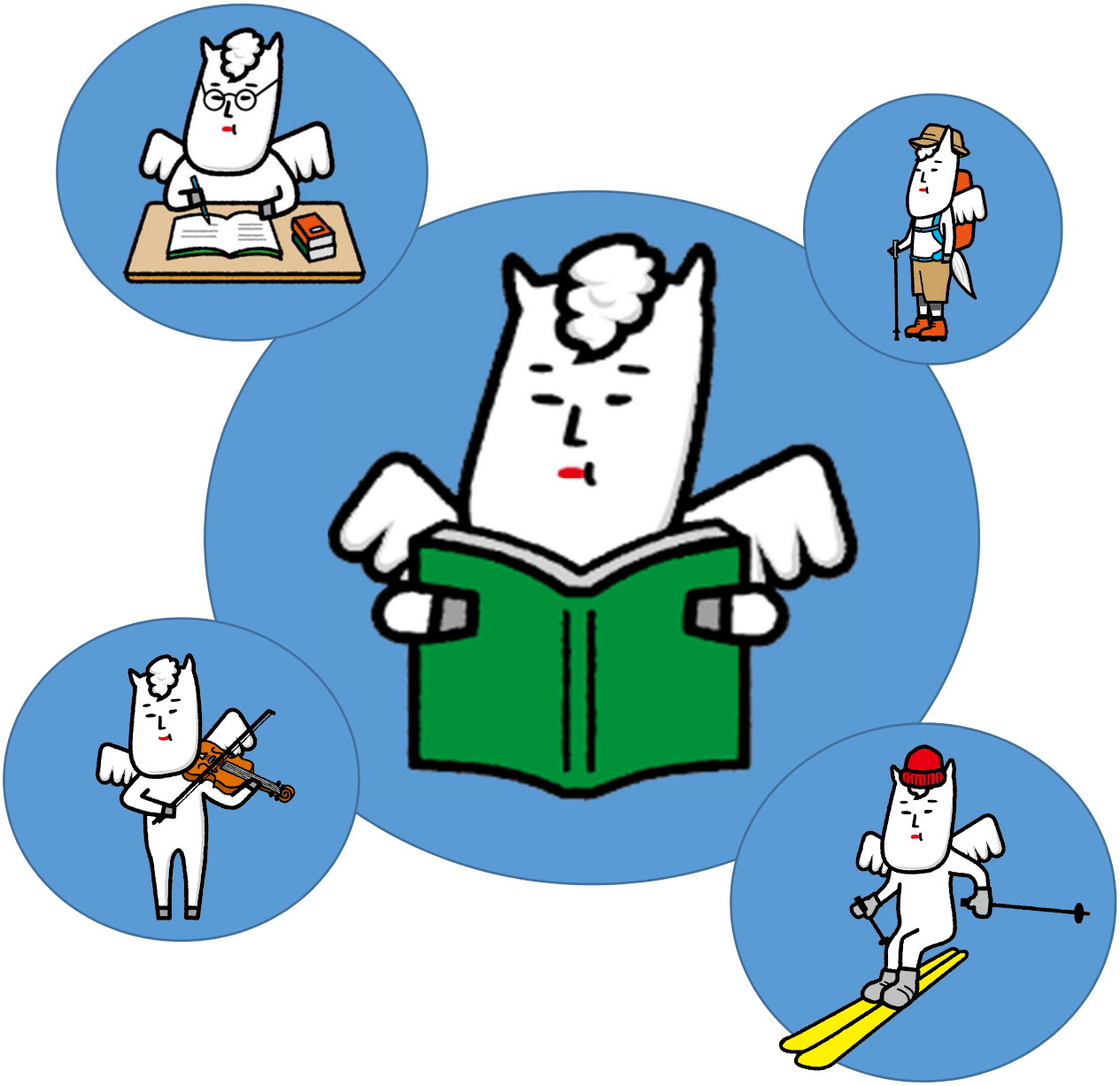
白馬村教育振興基本計画

（計画期間　令和６年度から令和１０年度）



白馬村キャラクター
ヴィクトワール・シュヴァルブラン・村男Ⅲ世

白馬村教育委員会

目　　次

第１章　計画の策定にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
経過
計画の位置づけ
計画期間

第２章　基本理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
基本理念

第３章　基本目標
①学校教育の基本目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
②生涯学習の基本目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
③スポーツ・文化振興の基本目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

第４章　重点施策
（１）学校教育の重点施策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
（２）生涯学習の重点施策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
（３）スポーツ・文化振興の重点施策・・・・・・・・・・・・・・・・11

第５章　資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
１　白馬村教育振興基本計画策定のためのアンケート調査報告書・14
２　白馬村の児童数推計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
３　施設改修計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
４　白馬村図書館等複合施設について・・・・・・・・・・・・・・・・29

第１章 計画の策定にあたって

経　過

教育振興基本計画は、平成１８年（2006）年１２月の教育基本法改正において、同法第１７条第１項により、「国は教育の振興に関する基本的な計画を定めること」が規定されました。また、同条第２項では、「地方公共団体は国の計画を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体における教育の振興のための施策に関する基本的な計画を定めるよう努める」ことが規定されています。また、平成２７年（２０１５年）４月には、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正され、教育行政の責任を明確にするため、「教育委員長と教育長の一本化」や「地方公共団体の長による総合教育会議の設置」、「地域の実情に応じた教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定める」など、地方公共団体の教育行政の仕組みは大きく変わりました。

長野県においては、第３次長野県教育振興基本計画の目標年度を迎えるなかで、令和５年（2023）に改正された５カ年計画として、第４次長野県教育振興基本計画が、発表されています。白馬村では国や県の教育政策、社会を取り巻く環境の変化を踏まえた上で、令和２年（２０２０）に、白馬村第５次総合計画の目標を達成するための教育行政の方向性を、白馬村教育大綱として定め、その計画年度を令和７年（2025）までとしています。また、村内小学校の老朽化や人口減少に伴う少子化予測を見据えるなかで、今後の学校のあり方について、「学校のあり方検討委員会」に諮問し、３年度に答申書が提出されました。答申書では少人数教育や、学校配置などのメリットやデメリットについての検討した結果や、今後の学校のあり方については広く住民の意見を聞くべきと記されています。教育委員会では、小中学校の教育や学校施設のあり方などについて、広く村民アンケートを行いながら、今後の白馬村教育の目指すべき方向性を模索してきました。

この教育振興基本計画は、このような社会情勢や村民アンケートの結果を踏まえ、白馬村総合計画や白馬村教育大綱の目標達成に向けての具体的施策と目標を定めるとともに、令和５年度に改正された長野県教育振興基本計画を参酌しながら、白馬村における教育振興の基本的事項を定めるものです。

計画の位置づけ

本計画は、教育基本法第１７条第２項の規定に基づき白馬村が定める、教育の振興のための施策に関する基本的な計画であるとともに、白馬村第５次総合計画に対応する白馬村教育大綱の個別計画としての性格を有しています。

計画期間

本計画は、参酌する長野県教育振興基本計画の計画期間を踏まえ、令和６年度（２０２４））を初年度とし、令和 10 年度（２０２８）を目標年度としますが、白馬村第５次総合計画が令和７年度（２０２５）までの計画であるため、それに合わせて見直しを行うものとします。

第２章　基本理念

基本理念

白馬村第５次総合計画基本構想

「白馬の豊かさとはなにか　-多様であることから交流し学び合い成長する村-」

白馬村教育大綱

「問い続け　学びあい　成長する」

白馬村教育大綱では、白馬村第５次総合計画基本構想の基本理念「白馬の豊かさとはなにか　-多様であることから交流し学びあい成長する村-」を実現するために、「問い続け学びあい　成長する」を基本理念としています。これらの基本理念をもとに、最終的に白馬村第５次総合計画の目標を達成することを、長野県教育推進基本計画を参酌するなかで、ともに学びあい、成長し、村民一人ひとりが「個人と社会のｗｅｌｌ-ｂｅｉｎｇ」を感じることができるよう

「それぞれのＷｅｌｌ-ｂｅｉｎｇを目指して」

学校、生涯学習、スポーツなどの分野において、具体的に施策を定めて進めていきます。

第３章　基本目標

白馬村教育大綱の基本方針に基づき、本計画における各施策の基本目標を定めます。

①学校教育の基本目標

教育大綱の基本方針	教育大綱に基づく教育振興基本計画における基本目標
１）確かな学びと豊かな人間性を育む教育の充実	１）課題に向かう主体的な学びと個別に最適な学びで学力向上を目指します。
・小中学校の連携を強化し、学力向上対策委員会における横断的・具体的な検討を行い、主体的で対話的な学びを充実させます。	・児童生徒の特性に合わせた学びで、習慣化と学力の向上を目指します。 ・日本語指導が必要な児童生徒の学びや、登校に困難さを抱える児童生徒の学びを評価、支援します。
２）地域の教育機能の活用	２）多様な他者との対話・協働による「世界を知り、郷土を学ぶ」探求的な学習を推進します。
・保護者や住民の学校運営の参画に取り組みます。英語力の向上や、郷土の魅力を知るための地域学習など各校の取り組みを支援します。	・地域の課題解決や SDGｓなど、小学校から中学校まで一貫した問題を探求する学習を研究します。 ・地域の子どもは地域で育てるために、学校運営協議会を中心に開かれた学校を目指します。 ・職場体験、文化財研究、民間教育機関や白馬高校との連携を進め地域や世界の事を知る学習を進めます。
３）安心・安全で充実した教育環境の整備	３）中長期計画による学校施設の整備と、デジタル教材を活用した教育を進めます。
・ネットワーク環境を整備しながら必要な教育コンテンツを導入することでＩＣＴ教育を推進します。学校施設は計画的に設備更新等を進め安全を確保するとともに学校の適正規模及び適正配置、施設等の整備についても計画的に推進します。	・１人１台端末やデジタル教材を活用し、個別に最適な学びや授業改善を研究します。 ・学校施設の長寿命化を計画的に行なうとともに、今後予測される児童数の減少を見据え、学校規模や配置、学校教育の方針を意見交換しながら決定します。
４）地域を担う人材の育成	４）白馬高校と連携し、地域を担う人材の育成を目指します。
白馬高校への支援を通じて、国際山岳観光地である本村を担う人材の育成を目指します。 ※グローカル（glocal）とは、「global（地球規模の）」と「local（地域的な）」を合わせた造語で、地域性を考慮しながら地球規模の視点で考え、行動することを表した言葉です。	・白馬村の地域資源を最大限に活用し、国際的な視野と地域視点で行動するグローカル（※）な人材の育成を行ないます。 ・地域から、環境・観光、国際を軸とする探究的な学びの機会を提案し、個々のキャリアデザインの具体化支援を行ないます。

②生涯学習の基本目標

教育大綱の基本方針	教育大綱に基づく教育振興基本計画における基本目標
1）学びを支える生涯学習の推進	1）生涯にわたり誰もが学びあえる拠点として、公民館を核とした生涯学習を推進します。
・公民館を地域コミュニティの核とし住民ニーズや地域の実情に応じた多様な学習機会を提供します。	・公民館の役割である「集い・学び・ふれあい」を重んじ、住民の学習ニーズを踏まえて暮らしに役立つ知恵や技術を学び合うことで、人づくり・地域づくりに貢献します。 ・村民が一堂に会してスポーツや文化活動を楽しむ機会から、世代や地域を超えた交流を創出します。
2）図書館の整備	2）効率的な図書館の整備・運営を進めます。
・住民の暮らしと文化振興の活力となるよう公共図書館を整備します。	・幅広い知識と情報をすべての人が平等に利用できるよう、資料の収集や保存、活用に取り組み、デジタル技術も活用しながら一人ひとりの学びに貢献します。
3）人権教育の推進	3）人権について考える機会を作ります。
・人権教育の学習機会を充実し、あらゆる偏見や差別のない社会を目指します。	・一人ひとりの存在や考え方、生き方が尊重され、あらゆる差別や偏見のない社会を実現するために、人権について学び考える機会を設けます。
4）青少年健全育成事業の推進	4）地域で子どもを見守る機運を醸成します。
・安全でよりよい社会環境を確保するためのパトロールや啓発事業に取り組むとともに子ども会育成会との連携により子ども同士で助け合い健全な心を育てる環境づくりを進めます。	・次の世代を担う子どもたちの健やかな育ちのために、様々な交流体験機会を創出するとともに、地域全体で成長を見守る機運を醸成します。

③スポーツ・文化振興の基本目標

教育大綱の基本方針	教育大綱に基づく教育振興基本計画における基本目標
1）スポーツによる健康増進	1）生涯学習として、スポーツに触れる機会を確保します。
・住民の誰もが生涯を通じてスポーツに親しむよう、スポーツイベントやスポーツ教室を開催しスポーツを通じたコミュニティづくりを推進します。	・白馬村スポーツ協会、スポーツ推進委員会、（一社）白馬村スキークラブ等と連携した各種教室、イベント、大会を実施します。 ・村民の生涯スポーツ、高齢者及び障がい者スポーツの推進のための各種教室、イベントを開催することにより健康増進を図ります。
2）子どもが日常的に楽しくスポーツに取り組むことができる環境づくり	2）子どもがスポーツに親しむきっかけづくりと、指導体制の整備を進めます。
・幼少期からのスポーツ習慣化を図るとともに体力づくりの基礎を養う環境を整備します。	・少年スポーツ祭、各種教室、体験会の開催やスポーツ少年団の活動支援により、子どものスポーツ活動の充実と体力向上の推進を図ります。 ・中学校部活動の地域クラブ活動への移行を行い、スポーツを行う環境を整えます。
3）スポーツ競技者の競技力向上	3）スポーツ競技者の競技力向上に向けた環境整備を支援します。
・継続的な指導者の確保に努め全国や世界で活躍できるトップレベルの競技者を目指します。	・白馬村スポーツ協会及び白馬村スポーツ少年団、（一社）白馬村スキークラブとの連携により選手のレベルに応じた指導体制を確立すると共に支援及び協力、助成を行います。 ・世界大会、全国大会の開催及び支援によりトップレベルの競技者の育成を行います。
4）スポーツ施設の整備及び充実	④計画的にスポーツ施設の整備を行い、利用の充実を図ります。
・村内の公共スポーツ施設の計画的な修繕や更新を進めるとともに施設の有効な利用を図り利用者ニーズに応えます。	・村内社会体育施設等の各施設について施設整備計画に基づき整備を行います。 ・白馬村スポーツ協会等の利用団体や区等と協力した施設整備の実施、施設を利用する個人、団体に施設の使用ルールの徹底を行います。

5）芸術文化の振興	5）住民の主体的な文化芸術活動を支援します。
・社会文化振興団体の支援やウイング 21 ホールなどでの芸術鑑賞の実施を通じて、芸術文化に触れる機会を提供します。	・音楽や伝統芸能など様々な芸術文化に触れる機会を創出するとともに、一人ひとりの自己実現と人々のつながりをつくるために住民の主体的な芸術文化活動を支援します。
6）先人が築いた有形・無形文化の継承	6）文化と自然環境を保護し、様々な場面での活用を進めます。
・伝統と文化を尊重する精神を育み、村に伝わる有形・無形の文化を継承するとともに文化財の保護と活用を図ります。	・登山やスキーなど先人が切り拓いた山岳文化や稀少な動植物を含め、地域に残る歴史的・文化的資源や自然環境を適切に保護し、教育やまちづくり・観光等に活用します。 ・地域にねざす歴史・文化の継承を図るために公民館講座等を活用して、リカレント教育（学び直し）の充実を図ります。
7）登山・スキーの歴史・文化の継承	→6）に統合
先人が切り拓いた山岳の歴史・文化を次世代に継承し、幅広い住民が登山やスキーなどに親しむ機会を増やします。	
8）自然環境保護	→6）に統合
自然環境を保全することが、特に必要な区域における生物の多様性の確保や、その他の自然環境の適切な保全を推進します。	

第４章　重点施策

前章に記した基本目標を達成するための重点施策と成果指標を次のとおりとしました。

成果指標は、定量的な「客観的指標」に加え、幸福感や自己実現等といった主観に基づく要素を「主観的指標」として設定しました。なお、数値目標を設定することが適切ではない主観的指標は、「現状以上」等の傾向で表しました。

（１）学校教育の重点施策

①課題に向かう主体的な学びと個別に最適な学びで学力向上を目指します。

・学習者主体の学校づくりに向けた研究

～具体的な施策～

学力向上委員会で、地域資源を掘り起こし探求的な授業案を研究

・自ら学習を調整して（個別に最適化）学べる環境の整備

～具体的な施策～

通常の教室に入りづらい児童生徒が学ぶための教室を設置し、学校に居場所を確保

多様な児童生徒に対応するため、日本語指導を行う支援員やボランティアの配置

・学校以外の「学びの場」との連携を強化し、多様な学びの充実

～具体的な施策～

子ども第三の居場所事業や、特性をもつ子どものための支援団体との連絡調整

長野県認証フリースクールとの連携や、中間教室などの設置を研究

【成果指標】

主観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
学校が楽しいと答える児童生徒数	84．2％	現状以上	学校評価アンケート
授業が分かると答える児童生徒数	86．6％	現状以上	学校評価アンケート

②多様な他者との対話・協働による「世界を知り、郷土を学ぶ」探求的な学習を推進します。

・職場体験や文化財保護、地域を知る学習などにより郷土の魅力を確認し、郷土愛を育む教育

～具体的な施策～

SDGｓや防災学習を通じた地域学習の積極的な取り込み

・学校づくりや地域づくりを支援するコーディネーターの育成や学習ボランティアなどの確保

～具体的な施策～

地域学校協働推進員を中心に、地域住民が学校に関わる機会の増

学校や生徒のニーズに応じた学習ボランティアの増

・移住者や多様な人との交流により、英語力の向上と国際的な視野の拡大

～具体的な施策～

インターナショナルスクールや白馬高校生との学びあいの場の創出

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
学校支援コーディネーター選任数	1	3	各校1名の選任を目指す
インターナショナルスクールとの交流回数	1	4	事務局調査　学期に2回を目指す
主観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
地域のことに誇りをもつ児童生徒数	88%	現状以上	学校評価アンケート

③中長期計画による学校施設の整備と、デジタル教材を活用した教育を進めます。

・デジタル技術を活用した学び方の選択

～具体的な施策～

１人１台端末を利用して、個人の学ぶスピードに応じたドリルソフトや学習方法の導入

コグトレやデイジー教科書など、特性を持つ子に対する学習支援ソフトの導入

・デジタル教材の利用促進のために ICT 支援員を配置

～具体的な施策～

サードパーティー製アプリの安全性検証と有効利用の助言

・１人１台端末の計画的な更新

～具体的な施策～

令和６年度　中学生２学年分更新、令和７年度　中学生１学年分、令和８年度　小学生更新

・児童数減少を見据え、適正な学級数や学校規模を広く住民と対話する機会を設け方針を決定

～具体的な施策～

学校運営協議会、PTA 総会などから意見交換を始め、村民まで拡大

※施設整備等は成果指標を定めない。

④白馬高校と連携し、地域を担う人材の育成を目指します。

・小中高連携しながら環境授業などを研究

～具体的な施策～

SDGｓの目標の中から、環境と地域資源をテーマにし、地域課題解決型授業を研究

・入学者の全国募集活動への協力による生徒数の確保

～具体的な施策～

地域みらい留学への参画、都市部への説明会開催などを実施

・進学希望を実現するため、公営塾の運営による学力の向上

～具体的な施策～

特進コースや資格取得コースの充実により進路希望を実現

・白馬村が第２の故郷となるように、寮や下宿を確保

～具体的な施策～

しろうまファミリー制度や下宿数を増やし、白馬村が第２の故郷になるように支援

・学校と白馬山麓事務組合が連携し、白馬高校の特色ある教育を柔軟に支援

～具体的な施策～

学校と事務組合をつなぐコーディネーターの雇用で連携強化

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
白馬高校入学者数	54	70	現状より増加することを設定
高校と地域をつなげるｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ数	1	3	現状より増加することを設定

（２）生涯学習の重点施策

①生涯にわたり誰もが学びあえる拠点として、公民館を核とした生涯学習を推進します。

・住民ニーズ・時代の変化に応じた多様な公民館講座の企画、運営

～具体的な施策～

公民館行事（はくば塾、ふれあい教室、里山道中、歴史紀行）、村民運動会、文化祭の開催

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
公民館講座数･受講者数	19 講座･760 名	20 講座･800 名	現状より増加することを設定
村民運動会参加者数	400 人	600 人	現状より増加することを設定
文化祭出展･出演団体数	71 団体	80 団体	現状より増加することを設定

②効率的な図書館の整備・運営を進めます。

・図書館の基本理念である「一人ひとりの成長に寄り添い、共に創る図書館」の実現

～具体的な施策～

図書館の多文化、多言語サービスの展開、資料の充実（一般図書・地域資料等）

デジタル技術の活用（デジとしょ信州利用促進）で、情報量を確保

子どもの読書活動を推進し、児童図書の充実、読み聞かせ等のイベントなど図書館に親しむ機会を創出

図書館ボランティアとの協働で、公立図書館への住民参加を促進

図書館と学校・美術館・公民館等との連携を目指し、多様なニーズに対応

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
図書館来館者数･貸出者数 （有効登録者数）	来館者:9,398 人 貸出者:712 人	来館者:15,000 人 貸出者:1,000 人	現状より増加することを設定
デジとしょ信州登録者数（累計）	75人	200 人	現状より増加することを設定

③人権について考える機会を作ります。

・あらゆる偏見や差別をなくし、お互いを尊重しあう機運の醸成

～具体的な施策～

人権に関する啓発・情報発信・講座・行事等の開催により人権意識の高揚

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
人権に関する講座･行事開催回数	2 回	3 回	現状より増加することを設定

④地域で子どもを見守る機運を醸成します。

・地域の子どもをみんなで育てる意識と様々な体験機会の創出

～具体的な施策～

子ども・青少年の健全育成に関する啓発・関係者との情報共有で見守る体制作り

多様な体験機会の創出（子ども会育成会や公民館等との連携）を通じた青少年健全育成

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
村主催子ども会行事参加者数	230 人	250 人	現状より増加することを設定

（3）スポーツ・文化振興の重点施策

①生涯学習として、スポーツに触れる機会を確保します。

・スポーツによる健康増進とコミュニティづくりの推進

～具体的な施策～

スポーツに親しむ機会の充実と生涯スポーツの推進、高齢者や障がい者スポーツの推進のための大会や体験会を開催

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
スポーツ教室等参加者数	3,991 人	3,500 人	事務局調査

②子どもがスポーツに親しむきっかけづくりと、指導体制の整備を進めます。

・幼少期からのスポーツの習慣化と環境整備

～具体的な施策～

子どものスポーツ活動の充実による体力向上の推進を目指し、スポーツ少年団などの活動を補助し、スポーツをする子どもの数を増やすとともに、指導者の確保

部活動の地域移行に向け、生徒や PTA などからのアンケートや意見交換

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
スポーツ団体登録者数	スポーツ協会　870 人 スポーツ少年団　223 人 スキークラブ員登録 369 人 ジュニア登録 115 人	750 人 180 人 320 人 90 人	少子化における登録者確保

③スポーツ競技者の競技力向上に向けた環境整備を支援します。

・全国や世界大会で活躍するスポーツ競技者の育成と支援

～具体的な施策～

指導者と選手の育成支援を施設と運営面からサポートする体制づくり

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
スポーツ功労賞等受賞者数	スポーツ功労賞 8 人 スポーツ大会激励金 7 人	12 人 20 人	事務局調査

④計画的にスポーツ施設の整備を行い、利用の充実を図ります。

・スポーツ施設の計画的な修繕と有効利用

～具体的な施策～

計画的なスポーツ施設の整備と、スポーツ推進のための各種教室、スポーツ団体登録者の確保、各施設の利用者の増加に向けた取組み

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
スポーツ施設利用者数	社会体育施設　61,652 人 ウイング21　74,684 人 クロスカントリー競技場　10,903 人	70,000 人 80,000 人 12,000 人	事務局調査

⑤住民の主体的な文化芸術活動を支援します。

・関係団体との連携・協力による文化芸術に触れる機会の創出

～具体的な施策～

各種団体と連携した文化芸術公演の開催

ウイング 21 ホール友の会の活性化

文化振興団体の活動支援

ウイング 21 ホールの利活用検討（合宿誘致等）

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
芸術文化公演開催回数・来場者数	6 公演、1,592 人	6 公演、1,800 人	現状より増加することを設定
文化振興団体登録団体数・構成人数	40 団体、人	45 団体、人	現状より増加することを設定

⑥文化と自然環境を保護し、様々な場面での活用を進めます。

・地域への誇りの醸成と知己資源の保存と活用、継承

～具体的な施策～

山岳文化に関する情報発信

地域の歴史・文化・自然に関する公民館講座や行事の実施

歴史民俗資料館の有効利用

山とスキーの総合資料館との連携

重要伝統的建造物群保存地区青鬼の保存と活用

地域の文化財に関する副読本の作成

【成果指標】

客観的指標	現　状	目　標	目標設定の考え方等
村民登山参加者数	27 人	30 人	現状より増加することを設定
震災アーカイブサイトアクセス数	4,000 アクセス／年	5,000 アクセス／年	現状より増加することを設定

第５章　資料

１　白馬村教育振興基本計画策定のためアンケート調査報告書

令和 4 年度に、児童生徒、保護者、教職員及び一般村民の皆さんを対象に行ったアンケートの集計結果と検証をまとめました。

２　白馬村の児童数推計

経済産業省のデータベース「RESAS」データをもとに今後の児童数を推計しました。

３　施設改修計画

令和 10 年度までにおける白馬村教育委員会事務局管理の施設改修計画をまとめました。

４　白馬村図書館等複合施設について

図書館や子育て施設などを複合施設として建設すべく検討を行ってきました。その経過と今後の整備方針についてまとめました。

白馬村教育振興基本計画策定のための
アンケート調査報告書

令和5年

白馬村教育委員会

1　調査目的

白馬村教育委員会では、2020 年 12 月に「学校のあり方検討委員会」を設置し、村内の小中学校において、児童・生徒数の減少や学校施設の老朽化に対応しながら、将来に渡って質の高い教育を維持するため、どのような教育環境が必要かを総合的に議論していただき、2021 年 11 月に答申をいただいた。

委員会では、村内小学校の「2 校の存続」と「1 校に統合」についても触れ、学校の適正規模・適正配置や望ましい学校の姿に対して、幅広く住民の声を聞くようにとの答申がなされている。

本調査は、今後新たに策定する「白馬村教育振興基本計画」の基礎データとして、子どもたちの学習や生活状況、学校の適正規模・適正配置や教育環境に対する村民各層の意識を把握することを目的に実施した。

2　調査対象

調査種別	調査対象
①小学生調査	村内の小学校の 4 年生～6 年生
②中学生調査	白馬中学校の 1 年生～3 年生
③教職員調査	村内の小中学校の教職員
④保護者調査	村内の小中学校、保育園、幼稚園の保護者
⑤一般村民調査	村内に住む男女 1,800 人を住民基本台帳から無作為に抽出し（ただし、上記①～④の対象者は除く）、調査の対象とした。

3　調査方法

調査種別	調査対象
①小学生調査	小学校を通じてアンケートを依頼、Ｇｏｏｇｌｅフォームから回答
②中学生調査	中学校を通じてアンケートを依頼、Ｇｏｏｇｌｅフォームから回答
③教職員調査	小・中学校を通じてアンケートを依頼、Ｇｏｏｇｌｅフォームから回答
④保護者調査	小・中学校、保育園、幼稚園を通じて各家庭にアンケートを依頼、Ｇｏｏｇｌｅフォームから回答。
⑤一般村民調査	郵送配布・郵送回収にて実施し、紙媒体で回答。

4　調査期間

調査種別	調査実施期間
①小学生調査	令和４年８月２２日　～　令和４年９月１３日
②中学生調査	令和４年８月２２日　～　令和４年９月１３日
③教職員調査	令和４年８月２２日　～　令和４年９月１３日
④保護者調査	令和４年８月２２日　～　令和４年９月１３日
⑤一般村民調査	令和４年１０月１１日　～　令和４年１０月３１日

5　設計数及び回収率

調査種別	設計数	有効回収数	有効回収率
①小学生調査	１９６人	１６４人	８４％
②中学生調査	２１１人	１８９人	９０％
③教職員調査	７４人	６１人	８２％
④保護者調査	６９０人	１９１人	２８％
⑤一般村民調査	１，８００人	６４４人	３６％

※一般村民調査では、白馬村に住民登録されている６，３０７人から、許容誤差 5%、信頼レベル 95%のサンプルを得るために抽出数を設定した。

※母集団から上記の条件を満たすために約 360 の回答数を設定した。その回答数を得るために、アンケートの回答率は 20%と想定し、360÷20%＝１，８００として抽出数を設定している。

※回収率は 36%であり、想定以上の回答率であった。

6　回答の考察（対象者ごと）

小中学生へのアンケート

　アンケートの回答について、傾向や意識を考察する。まず、児童生徒へのアンケートについてであるが、質問の構成は以下のとおりとして、小学生高学年と中学生にアンケートを行っている。

基本事項	在籍校　　学年　　家族構成
学校全体に関する事	学校は楽しいか　その理由
学校生活に関する事	困っていること　　学校に望む事
学習に関する事	得意な科目　　苦手な科目
人間関係に関する事	先生への相談
人数に関する事	クラスの人数　クラスの数　　学校の規模
通学に関する事	通学時間　　通学方法　　満足度
施設に関する事	いいなと思う校舎
生活に関する事	習い事　生活時間　お手伝い　家族との会話　いま関心があること　相談できる人
自分に関する事	自分のことは好きか　自信をもてること　　尊敬する人 将来なりたい人物像

　それぞれの項目での児童生徒のアンケート結果を比較しながら考察する。まず基本的事項についてあるが、児童・生徒共に 84%から 90%と高い回収率であった。そのため、所属学校や学年なども偏りがない回答となっている。

　家族構成では、核家族世帯が 70%を超える結果となっている。なお、令和３年国民生活基礎調査（厚生労働省）による世帯員と世帯人員の状況では、児童のいる世帯は全国で 1,073 万 7,000 世帯であり、うち核家族世帯は 886 万 7,000 世帯、割合として 82.6%という数値が公表されている。近年移住される人が増え、核家族化が進んではいるものの、民宿など観光を生業としていることも影響しているかと思うが、全国よりも多少低い数値となっている。次に「学校全体に関することについて」に関する回答で、児童生徒に投げかけた問いは「学校は楽しいですか」とストレートな問いであった。ともに「とても楽しい」「まあまあ楽しい」が 90%を超える回答であったが、中学生になると「とても楽しい」の回答が

減少し、「あまり楽しくない」「楽しくない」が増加する結果となった。「とても楽しい」「まあまあ楽しい」の理由の違いを比較すると、小学生で比較的高い回答であった、「授業」「給食」「図書室」などの学校生活に関することは、中学生になると回答がさがり、「学校行事」「友達がいること」などが増えている（図１）。これは、学校や集団生活に楽しさを感じる小学生世代と、個人の自発的活動や友人関係を重視する中学生世代の違いが表れているのではないかと推測する。

図１：学校のどんなところが楽しいですか

「あまり楽しくない」「楽しくない」の理由の違いでは、中学生になると「授業」「勉強」に対する回答が増加し（図２）、集団生活への不満よりも、個人の欲求や学習へのあせり、不安などが表れているように感じられる。しかし次の質問の「学校で困っていること」については半数近くは「特にない」と回答しており、不満はあるものの、学校が原因となって困っていることは少数となっている。児童、生徒を比較すると、前問の傾向と同様で、中学生になると人間関係については減少、学習面は増加の傾向となっている。この傾向は「学校や先生に望むこと」の問でも現れており、小学生では授業内容や先生とのふれあいなど集団生活の中での関わりに対する欲求が多いが、中学生になると「勉強がわかるように」「一人ひとりの力に合わせた」など個人としての欲求が多くなっており、集団で活動する年齢層から、自立し始める年齢層への移行が表れている。

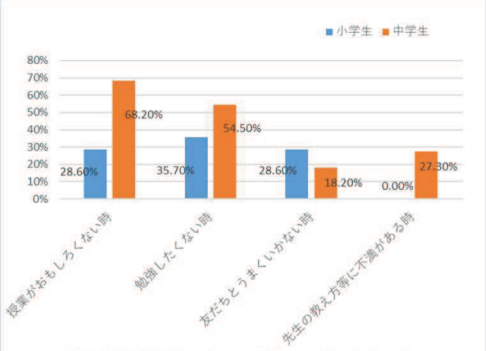


図２：学校が楽しくないと思うのはどんな時ですか

なお、GIGA スクール構想により小学生にもタブレットＰＣが整備された影響で、小学生ではタブレットやコンピューターを使う学習への欲求が多いが、中学では以前から導入済であったため、ＰＣを使用した学習への欲求は少ない。

次に学習に関することに対する回答では、児童生徒ともに「好き」「得意」な科目は体育や図画工作・美術であった。しかし、小学生で人気のあった「理科」「音楽」は中学生になると減少している。教科が専門的で難しくなることとなどが一因ではないかと考えられる。このことは「英語」で顕著にみられ、小学生で「苦手（嫌い）」は 27.2%であったものが、中学生になると 48.9%に大きく増加している。小学生の「好き」「得意」の部分で数値の低い「国語」「算数」「社会」は、「嫌い」「苦手」の分野で、そのまま数値が増加している。なお、令和４年度に実施された全国学力・学習状況調査によると、白馬村の小学６年生では、国語が「全国平均をやや下回る」、算数と理科が「全国平均と同程度」であった。また中学３年生では国語、数学、理科ともに「全国平均と同程度」という結果であった。小学生ではアンケート結果と傾向が一致したが、中学生では勉強習慣も定着し、平均的レベルに落ち着いているように見られる。

次に人間関係に関する回答では、授業以外で、個別に先生に教えてほしいことはあるかの問いでは、小学４年生から中学１年生になるまでは「ある」の割合は減少していったのち、中学２，３年生と増加に転じる結果となった。先生に頼る傾向から徐々に自立し、その後受検や進路など様々な悩みが増え、先生に相談したい傾向が出たのではないかと思われる。

次に人数に関する回答では、１クラスあたりの人数については、南小では「１０～１９人」、北小では「20～29人」、中学では「20～２９人」が良いとする回答が一番多くなっている（図３）。これは、それぞれ現在所属する学級の人数が良いと答えた結果であると思われる。選んだ理由については、多人数の選択理由は「いろいろな人がいて面白いから」や「人数が多いとにぎやか」などの理由が多数を占め、少人数の選択理由では、「まとまりやすい」「勉強がしやすい」などの理由が多数をしめている。クラス数については、小学生では１クラス、２クラスが良いという意見が多いが、中学生になると３クラス以上という意見が増えてくる（図４）。理由としては、友達関係が広がる、学校行事が盛大にできる、切磋琢磨ができるなどの意見が多く、小学生ではクラス内での活動が、中学生になると、南小と北小の児童が一緒になり、人数も増えて学年内で切磋琢磨する活動や行動範囲が広がることから３クラス以上あった方が面白いといった意見が増えるのではないかと思われる。また学校の満足度については、学校規模、クラス規模等に関する満足度では小中学校ともに９０％以上が満足、どちらかといえば満足といった回答であった。

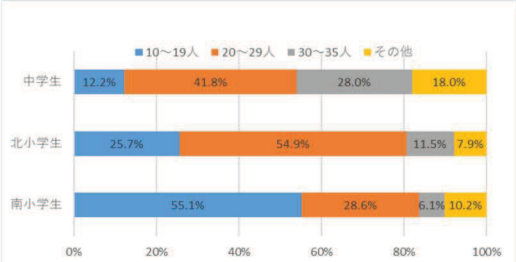


図３：１クラスあたりの人数は何人くらいが良いと思いますか

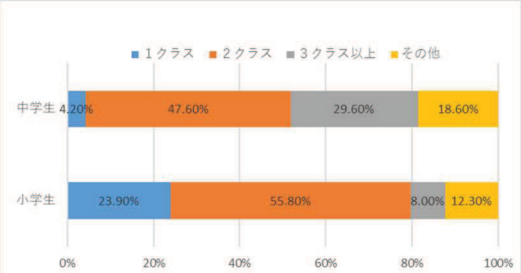


図４：１学年あたりのクラス数

表１：通学時間と方法に関してどれが良いですか

小学生

時間	15分以内	30分以内	45分以内	その他
	29.40%	33.10%	25.60%	11.90%
方法	徒歩	スクールバス	その他	
	50.90%	24.80%	24.30%	

中学生

時間	15分以内	30分以内	その他	
	58.80%	27.80%	13.40%	
方法	徒歩	自転車	スクールバス	その他
	14.30%	60.80%	11.10%	13.80%

通学に関する項目については、表１から通学時間は、小学生は58%が３０分から４５分以内が良いと答えているが、中学生では58%が、１５分以内が良いと答えている。中学生が良いと思う方法で回答では60%が自転車と答えているので、小学生と中学生の時間の開きは、徒歩なら３０分から４５分以内で、自転車なら１５分くらいが良いという傾向の回答になっていると思われる。通学に関しては小学生中学生ともに「友達と歩くのが楽しい」「歩くと運動になる」といった意見が共通して見られる。

施設に関することでは、建て替えを予定している小学校の良いと思う校舎についての問いでは、南小では「広くて大きい学校など空間や設備面」での希望が見られるほかに、「今のままがいい」などの意見も見られる。北小では、「広くて過ごしやすい」「トイレがきれい」などの他に「床や壁は木がいい」「白馬の景色が見えたらいい」などの意見がある。両校とも共通するのは、図書館や遊具、体育館などの附属施設の充実に対する意見が見られる。

中学生の意見は多岐にわたり、「校舎」「交流」「使いやすさ」「景色」「ＩＣＴ」「体育館」「トイレ、設備、備品」などがあった。様々な意見があるが、大別すると「きれい」「快適」「広い」点についての意見が多い傾向となっている。その他の意見としては「楽しい学校」「のびのび過ごせる施設」などの意見があった。

生活に関することについての回答では、学校以外での習い事は、児童生徒ともにスポーツチームが一番多い結果となった。また中学生になると学習塾の割合が増えるが、習い事にいかない「特になし」が増えていることにより全体では習い事に通う人数は減ってる。

生活習慣では、小中学生ともに概ね規則正しい生活が確立されてる。中学生になると様々な活動や家庭

学習などが増えるため、食べる時間や寝る時間については決まっていないと回答する割合が増えている。また、家で手伝うことは、ご飯の準備や片付けであり、家庭での話題などについては、学校であったことや友達の事であるというのは、小中学生とも同様の傾向であったが、「家族と話すことはほとんどない」「将来の学校や職業のこと」の回答は中学生になると増える傾向にある。

児童生徒が気になっていることは、小学生では「特にない」が一番多く、「友だちのこと」が「勉強」を上回っているが、中学生になると「将来の学校や職業のこと」が一番多く、つぎに「勉強のこと」になり、「友だちのこと」や「特にない」は減少している。中学生になり、自立し始める年齢を迎え、高校進学や将来の職業を真剣に考え始めていることが表れている。

悩みについては、小中学生ともに概ねは「相談できる人」がいると回答している。小学生では、母親、友だち（同じ年）、父親の順であるが、中学生なると、友だち（同じ年）、母親、父親の順になるとともに、学校の先生などを含めて、大人への相談の割合は減少する傾向が見える。また、「インターネット」の回答割合も増えている（図５）。

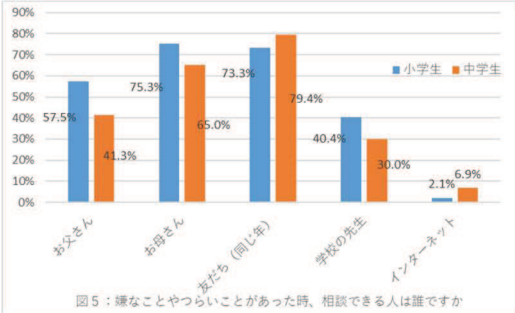


図５：嫌なことやつらいことがあった時、相談できる人は誰ですか

自分のことは好きですかの問いに対し、中学生になると「きらい」「どちらかといえばきらい」が増えている。このことは「自分に自信のもてることはありますか」にも同じ傾向が表れており、中学生になると自分に自信を持てることが「ある」と回答する割合が減っている。学年別にみると、小学生は高学年に向かって「ある」の割合が上昇し、中学生では高学年に向かって「ある」の割合が減少していく傾向となった。自らの将来像を尋ねる設問では、中学生は「いろいろなことにチャレンジする人」「社会の役に立てる人」など具体的な行動目標の割合が増加し、小学生に比べて具体的な将来像を描いている様子がうかがえる。

<u>小中学生へのアンケート総括</u>

小学生、特に高学年では集団の規則を理解して、集団活動にやりがいを感じており、中学生では自己を見つめ自らの生き方を模索して、「個」を重視し、また大人との関係よりも、友人関係に自らへの強い意義を見出す傾向がある。

北小学校児童、中学生の多くが、２０人～３５人、２～３クラスを望んでいる。友人関係の広がり、クラス替えが可能、大人数による切磋琢磨などが理由となっている。中学生の中には、学級数や人数の少ない南小卒業生も含まれており、少人数学級と標準人数学級を経験した生徒の意見が反映されていて、学校の活動をする上で、児童生徒はある程度人数が居る方が理想と思っているようだ。

小中学生のおよそ５％が「家族と話すことはほとんどない」と答えており、親子のコミュニケーションが不足する思春期特有の課題が表れている。

教職員、保護者に対するアンケート

次に直接学校に関係する教職員及び保護者に対するアンケートについて考察する。

質問の構成は、以下のとおり

基本的事項	所属　居住地
人数について	クラスの人数　クラスの数　　学校の規模
通学について	通学時間　通学方法
小学校の規模について	２校存続　統合
小規模校について	メリット　デメリット
学校施設について	望むこと

まず回答者の割合であるが、アンケートは小中学校の教職員と保育園、幼稚園、小中学校保護者を対象に実施したもので、お住いの行政区、通う学校等については、偏りなく回答を頂いた。また教職員についても、すべての学校から回答を得ることができている。

最初に小学校の学級の児童数についてであるが、図６から教職員の回答は、10～19 人と、20～29 人の２回答に絞られた。どちらかと言えば 10～19 人が若干多くなったが、ほぼ同数となっている。教職員の受け持つ児童数という視点からすると多くても 30 人以下、少なくても 10 人以上が教育活動を進めるには望ましいと考えていることが伺える。少人数の理由では「目のとどきやすさ」、大人数の理由では「切磋琢磨し、社会性や協調性」などが挙げられている。しかし、保護者の意見は 20～29 人が 66%を占め、理由としては「社会性や協調性を身に付けさせたい」ことが多くを占めて、小学生年齢で保護者の望むことが表れているようである。

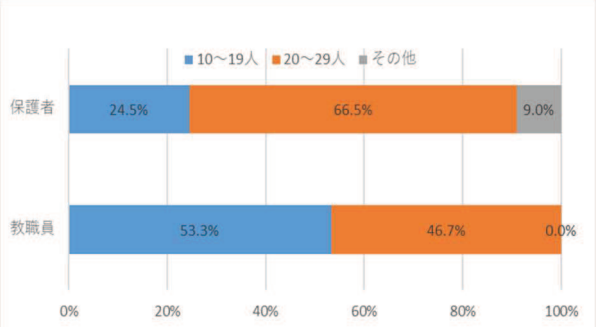


図６：小学校１学級の児童数は何人くらいが望ましいか？

次に中学校１学級の生徒数についてでは、教職員の回答は、20～29 人の割合が児童数の設問から大きく増加し 83%を占めるとともに、30～35 人といった回答も 3.4%あった。この傾向は保護者にも同様の傾向がみられ、30～35 人が 17%と増え、10～19 人が 10%と減少している。小学生年齢に比較して、自立し始める中学生年齢では、少人数での個別指導よりも、大人数の中で切磋琢磨しあう環境が望まれている傾向が見える。教職員、保護者ともに中学生は集団の中で生きる力をつけさせることを求めている。

次に１学年あたりの学級数についての設問であるが、保護者、教職員ともに同様な傾向の回答となって

いる。半数は２学級が好ましいとの回答であり、30 から 40%が３学級となった（図７）。保護者への設問で、現在の学校規模への満足度を回答していただいているが、８０%ほどが「満足」「ほぼ満足」としている。

次に通学時間と方法についてであるが、教職員、保護者ともに小学生の望ましいい徒歩による通学時間は、30 分以内が一番多い回答であった。教職員は 15 分以内から 45 分以内の回答であったが、保護者では 60 分以内といった回答も 2.2%あった。また、望ましい通学方法は、図８から教職員は「徒歩」が 88%、ついで「スクールバス」となり、「保護者による送迎」はなかったが、保護者は「徒歩」68%、「スクールバス」24%、「保護者」、「公共交通機関」と多様な回答があった。教職員は小学校としての望ましい通学方法を原則的な選択肢をし、保護者は、現在の通学方法や住んでいる環境から最適と考える方法を現実的な選択として回答しているようにうかがえる。

中学生の徒歩又は自転車による通学時間は、保護者、教職員ともに３０分以内が約 72%と同じ割合であったが、保護者に回答が多かった「15 分以内」は教職員ではほとんどなく、４５分以内までがほとんどであった（図９）。体力が発達する中学生年齢においての望ましい運動量といった観点からも３０分から４５分が必要な時間とした考えも多いのではないかと思われる。しかし、通学方法では、保護者において徒歩の割合が減少し、スクールバスの割合が増えているのは、小学生と同様の理由もあるが、通学範囲が小学生よりも広いことが要因であると思われる。

次に少子化を見据え、今後の小学校をどうしていくべきかの問いに対しては、図 10 から保護者、教職員ともに「統合し、適切な児童数等を確保する」が一番多い回答であったが、教員は「2 校存続」と「学校が地域とともに歩んできた歴史を重視」が次に続き、この２回答を「2 校存続」と見た場合は、統合を上回る結果となる。一方、保護者は「跡地利用」や「コスト重視」などが「統合」に続くため、それらを「統合」といった意見とすると、「学校統合」とする意見が大勢を占める結果となっている。

少人数のメリットを生かす方法の設問では、「きめ細か

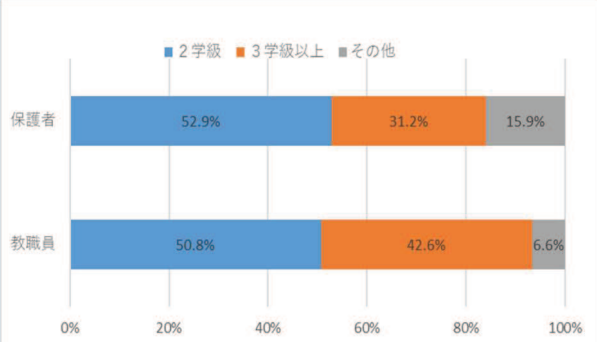


図７：１学年あたりの学級数は、何学級くらいが望ましいと思いますか

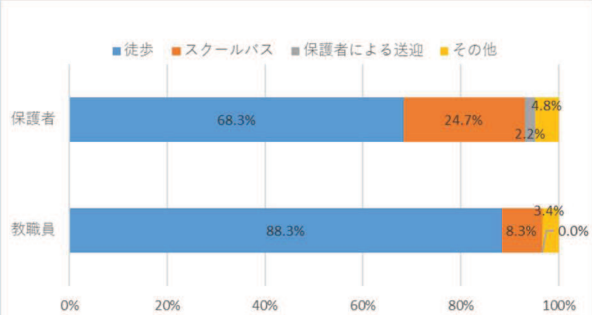


図８：小学生の望ましいと感じる通学方法はどれですか

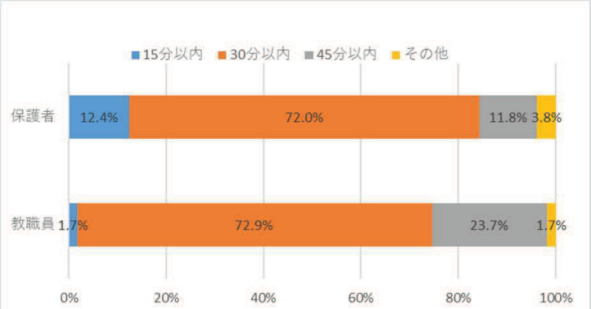


図９：中学生の望ましいと感じる通学時間はどれですか

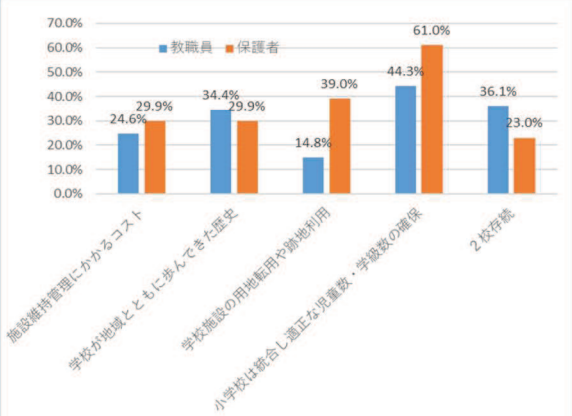


図10：小学校の存続や統合を検討するうえで、村はどのような点を重視すれば良いですか

な指導」は教職員では１番、保護者でも２番目に多い回答であった。しかし、それ以下の回答では、教職員では「地域連携」「体験学習」と続くが、保護者は「体験学習」「実技指導」となる。保護者の回答には、教職員ではあまりなかった「白馬村独自の教育課程」にも多くの回答が寄せられている。この設問では、学校の立場として地域に期待する部分を回答したものと、地域住民が学校に期待する部分を回答したものとの立場の違いが回答に表れていると思われる。

村民に対するアンケート

次に一般村民に対するアンケートについて考察する。

質問の構成は以下のとおり

基本的事項	住所　年齢
学校について	重要と考える学校像
人数について	クラスの人数　クラスの数　　学校の規模
学校規模について	学校規模
通学について	通学時間　通学方法
小学校の規模について	2校存続　統合
小規模校について	メリット　デメリット
学校施設について	望むこと

村民アンケートは、すでに回答していただいた「児童生徒」、「保護者」、「教職員」を除く 1,800 名を無作為に抽出して行った。回収は 644 件で 36%と、比較的高い回収率となった。また回答は村内すべての地区から回収されている。

年代別では、保護者等を除いたため、50 代から 80 代までの世代が多く、70 代が 27.8%で一番多い結果となった。以上のことから、自らが回答できる全ての年代からの回答を得ることができたと考える。

最初に「重要と考える学校像」に関しての設問では、「白馬村の地域性や独自性を生かした特色ある教育」が一番多くなっているが、教職員や保護者が多く回答した「表現力やコミュニケーション能力を伸ばす」、「子どもたちの個性や自主性を育む教育」は、比較すると低い数値となった。教職員は「自他を大切に、心豊かな生活」「自ら学ぶ意欲」、保護者は「子どもたちの個性や自主性」「表現力やコミュニケーション能力」が一番多い回答となったので、教職員は「学力」、保護者は「個性」、一般村民は「地域」といった点に重点を置いているように考える。

次に１学級あたりの児童数についての回答は、保護者の回答とほぼ同じ傾向となった。「20～29 人」が 60.9%で、「10～19 人」が 21.3%である（図 11）。この部分は、「10～19 人」が一番多かった教職員とは大きく分かれることになった。回答の理由では「色々な人間関係があり、社会性や協調性を身に付けられる」が一番で、次いで「児童の一人ひとりに目が届き」となっている。児童一人ひとりに目が届く人数の認識が、一般村民と教職員では差が生じていることが結果として表れている。１学級あたりの生徒数についても一般村民と保護者の回答は同じ傾向となり、「20～29 人」が一番多く、「30～35 人」が２番目となっている。教職員は「20～29 人」が 83.1%で逆に「30～35 人」は少数となっている。中学生年齢になると、自立してくる世代となることにより１学級あたりの人数は増やす方がよいと、それぞれ考えているが、目の届く適正人数については、児童数と同様に教職員と保護者、一般村民の認識がわかれる結果となっている。

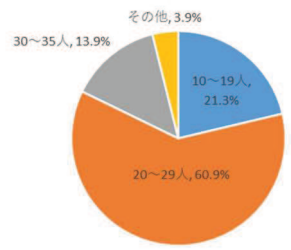


図11：小学校１学級の児童数は何人くらいが望ましいか

次に１学年あたりの学級数については、保護者、一般村民は「わからない」、「その他」などを選択する回答があるために割合は少なくなるが、全体の傾向は「2 学級」、「3 学級以上」が望ましいという結果である（図 12）。これは現在の白馬村における児童生徒数から見た望ましい学級数として、それぞれに回答した結果であると考える。その理由としては、「行き届いた指導を受けやすい。」が一番多く、「クラス替えができて友だちが広がり、児童・生徒同士の関係を新しくできる。」「学校行事が盛大にできる」が続いている。また、３学級が望ましいと回答した人の中は、「クラス替えができて友だちが広がり、児童・生徒同士の関係を新しくできる」が圧倒的に多くなり、「行き届いた指導を受けやすい。」の３倍に近い回答数となっている。この傾向は、「ある程度の人数は必要」と思っている人が大半であり、指導に重点を置く考えの人は「交流ができる最少人数で２学級」を選択し、交流や活動に重点を置く考えの人は「３学級以上」を選択していると思われる。

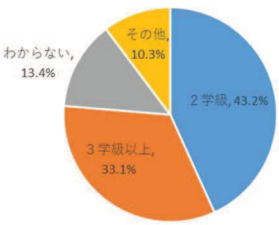


図12：１学年あたりの学級数は、何学級くらいが望ましいか

次に小中学生の望ましい通学時間と方法では、小中学生ともに３０分以内の通学時間が一番多い結果であった。この結果はアンケート全体を通じて共通する結果となっている。しかし、通学方法ではスクールバスや公共交通機関、自転車など多様な方法に回答が分かれた。小学生は「徒歩」と「スクールバス」が多いが、歩いて体力をつけるといった考え方や、近年のクマや不審者などの影響もあり、「スクールバス」と回答された方が多かったのではないかと感じる。図 13 から中学生は「自転車」が一番多く、「徒歩」、「スクールバス」、「公共交通機関」と続くが、これには、自立して様々な方法で、自分で通学してほしい希望も込められているのではないかと考える。

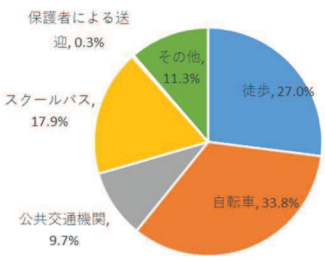


図13：中学生の望ましいと感じる通学方法はどれですか

小学校の存続や統合についての設問では、図１４から「小学校を統合し、児童数・学級数を確保」が半数を超える回答となった。また、教員のアンケートでは２校存続が３６％であったが、２８％と減少する結果となった。統合以外の回答での傾向は教員と多くは違わないが、施設維持コスト、地域とともに歩んできた歴史の回答割合が減少し、学校施設の用地転用や跡地利用の割合が増加しており、多くの方が将来的な人口減を見据えて施設縮小を考えているように感じられる。小規模校のメリット・デメリットについては、メリットを生かすためにはの回答の傾向は教員と大きく変わりはないが、「きめ細かな指導」、「地域学習」、「体験学習」などの回答割合が減少し、「独自の教育課程で特色ある取り組み」が大きく増加しているのが特徴的である。少人数であるので、個別指導を重視する教員の考え方と、少人数であるので他とは違った取り組みを期待する村民とで回答が分かれたようである。デメリットを解消するための回答割合も大きくは違わなかったが、教員の回答に比較して小中学校間の教育活動、小中一貫教育に対する回答が増加する傾向となっている。

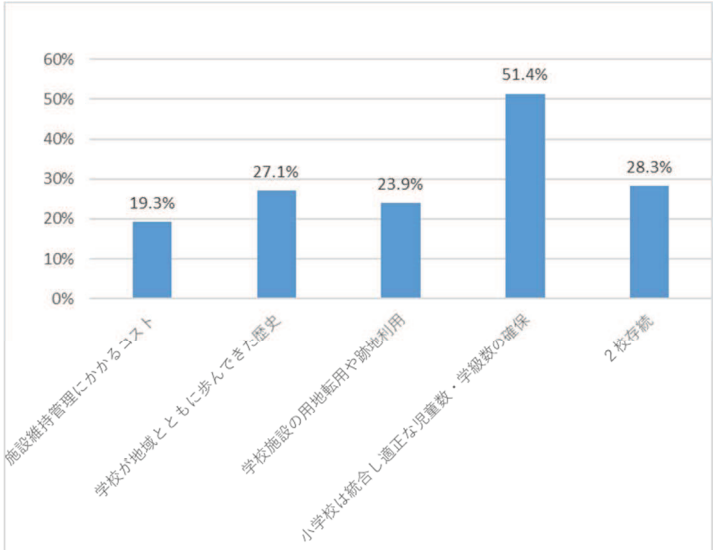


図14：小学校の存続や統合を検討するうえで、村はどのような点を重視すれば良いですか

7　全回答の考察

全体を通じて回答を考察する。現在の学校や学級数等については、現在通っている児童、生徒、教職員、保護者を通じ、概ね満足している。しかし、学校の位置に起因する通学時間や通学方法について、好ましい時間、距離、方法は様々な意見があり、これは現状の通学方法等に対しての希望や要望が出されたものであり、必ずしもすべての人が満足している訳ではないことの表れであると考える。学校の位置による通学時間は、概ね共通した意見であったが、その時間で通学するため方法については、保護者や村民は多様な通学方法を希望していることが回答に表れた。

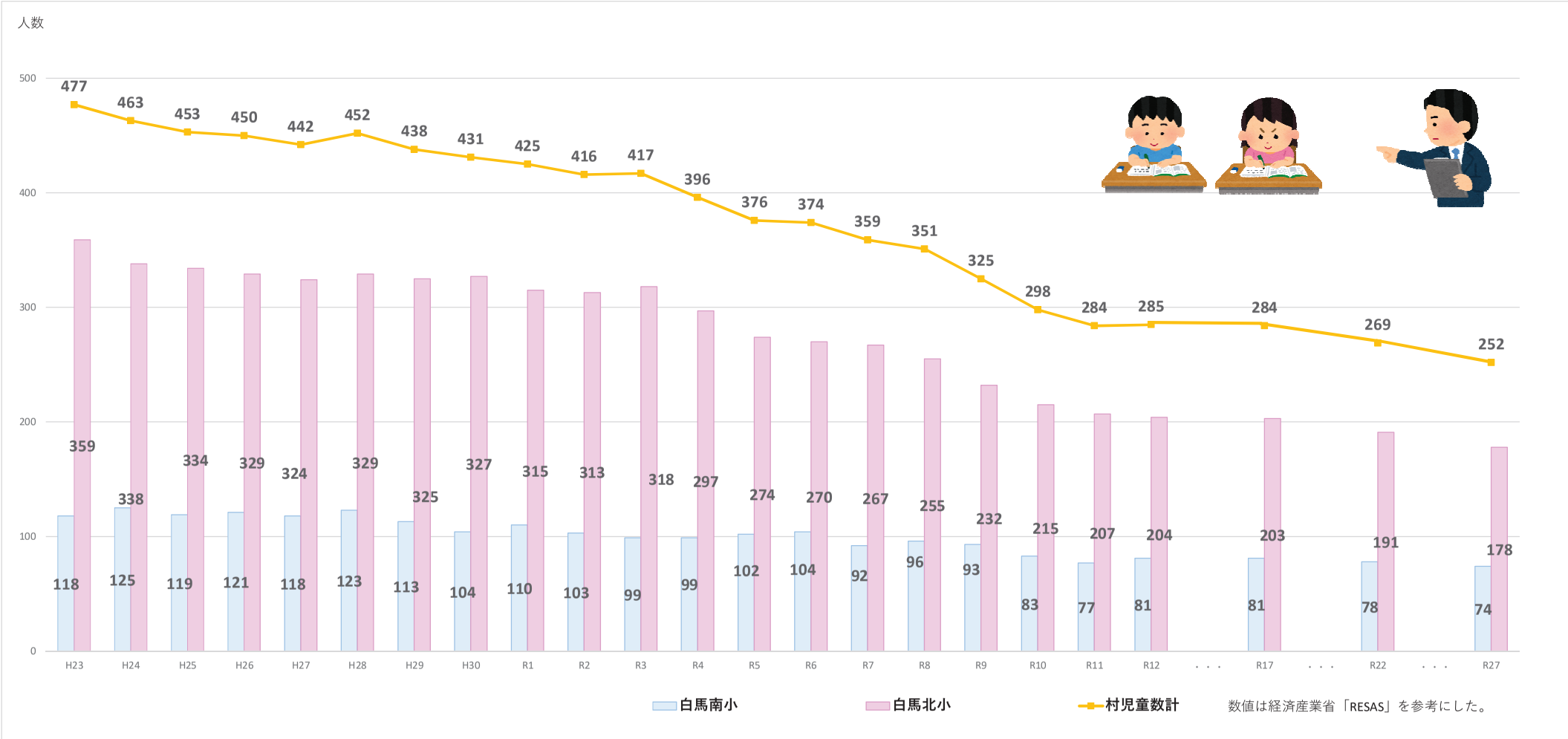
また、学級の人数や教育方針については、教職員と保護者、村民では意見が分かれた。現場で児童生徒を指導する教員は、教員１名が、一人ひとりに目が届くきめ細かい指導をするための現実的な人数として少人数の回答が多かったが、保護者や村民は、現在の標準である３５人学級が少人数のイメージであり、ある程度の人数は必要と回答しているために意見が分かれたものと思われる。現在、国では小学生は３５人学級が標準となっており、今後少子化が進むにつれ、３０人学級など、さらに少人数編成が進むことが予想される。

また、少人数を生かした教育についても「きめ細かな指導」をメリットとあげる教職員が多かったのに対し、保護者や村民は「独自の教育課程」を望む声が多い結果であった。村民等は、小規模校であることを更に強みとして、他の学校ではできない魅力的な教育活動を求めている。

学校の統合、２校存続に関する意識については、少子化を見据えて統合も止む無しとする意見が多い。これは前述の学級の人数にも表れているが、教育活動を行うに当たり望ましい人数を確保するためには学校の統合も必要と考える方が多かったと思われる。しかし、教職員の回答では、「２校存続」「学校が地域と歩んできた歴史を重視」の回答が多くあり、教育現場職員は、現状の人数、体制が維持できるのであれば、現在の体制が望ましい環境であると考えているようである。

今回のアンケートでは、現在の学校の状況や今後の学校規模、教育活動などについて広く意見を伺った。行政が行うアンケート調査としては、高い回答率であり村全体の意見として信頼できる調査であると考えている。村民の多くの意見は、「現在の学校」に満足しているが、少子化が進む状況において、好ましい教育活動を進める人数を確保するためには小学校を統合することも止む無しとしつつ、現状に合致した多様な通学方法や少人数を生かした魅力的な教育方針を望んでいることが回答から浮かび上がる結果となっている。

2　白馬村の児童数推計


人数
500
400
300
200
100
0
477
463
453
450
442
452
438
431
425
416
417
396
376
374
359
351
325
298
284
285
284
269
252
118
125
119
121
118
123
113
104
110
103
99
99
102
104
92
96
93
83
77
81
81
78
74
359
338
334
329
324
329
325
327
315
313
318
297
274
270
267
255
232
215
207
204
203
191
178
H23
H24
H25
H26
H27
H28
H29
H30
R1
R2
R3
R4
R5
R6
R7
R8
R9
R10
R11
R12
・・・
R17
・・・
R22
・・・
R27
白馬南小
白馬北小
村児童数計
数値は経済産業省「RESAS」を参考にした。

3　施設改修計画

1,000千円以上対象

単位：千円

	2024 令和６年度		2025 令和７年度		2026 令和８年度		2027 令和９年度		2028 令和１０年度	
教育課										
白馬北小学校	遊具（ブランコ）改修 1,459		エアコン整備 6,334	遊具（すべり台）設置 2,454	中・南校舎屋根塗装 20,000	タブレット更新 28,401	体育館ＬＥＤ照明化 20,000	中・南校舎教室床修繕 1,500		
白馬南小学校	FF修繕 1,258		避難階段設置・北校舎床改修 7,304	FF修繕・エアコン設置 1,481	タブレット更新 9,467				北校舎外壁塗装 10,000	体育館屋根・外壁補修 40,000
白馬中学校	タブレット更新 20,639		タブレット更新 10,320	LED工事 1,296	エアコン設置 13,377		外壁補修 30,000			
神城教員住宅	神城教員住宅解体 69,168									
白馬村北部農業者トレーニングセンター			ＬＥＤ化推進 16,500							
Ｂ＆Ｇ体育館									床研磨 20,000	
Ｂ＆Ｇプール									上屋更新/塗装 25,000	
生涯学習スポーツ課										
ウイング21	エアコン設置工事 12,898	高圧受電設備更新 5,720	空調機設備修繕 1,500	非常放送設備・監視カメラ設備更新 5,280	アリーナフロアインド更新 5,000		屋根改修工事 100,000			
	ﾏﾝﾎｰﾙﾎﾟﾝﾌﾟ更新 3,919	ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞﾙｰﾑﾘﾆｭｱﾙ 7,000	ＬＥＤ化推進 7,200							
白馬クロスカントリー競技場	法面工事（施工管理委託含む） 20,800		管理棟東側出入り口改修 5,000	MTBコース整備、設計 1,000	管理棟外壁塗装 3,000	MTBコース整備、設計 10,000	4号橋撤去 5,000	ﾛｰﾗｰｽｷｰｺｰｽ改修 20,000	駐車場舗装工事 10,000	
白馬ジャンプ競技場			人工降雪機ノーマルヒル部の拡充 25,000		ブレーキング人工芝更新 58,300					
青鬼土蔵	村所有土蔵の保存修理 6,358									
事業費（見込）合計	136,499	12,720	79,158	11,511	109,144	38,401	155,000	21,500	65,000	40,000
事業費（見込）合計	149,219		90,669		147,545		176,500		105,000	

4　白馬村図書館等複合施設について

これまでの検討経過

2017. 7～　図書館施設検討委員会（2018.10まで全9回）
2017. 10　白馬高校公営塾しろうま學舎ワークショップ
2017. 11　文化祭での意見聴取、シニアクラブとの意見交換
　　白馬中学校ワークショップ、一般公開ワークショップ
2018. 7　アンケート
2018. 8～　有識者会議（2019.2まで全4回）
2018. 9～　公募によるワークショップ（2018.11まで全3回）
2019. 3　基本構想策定（子育て支援機能の複合化決定）
2019. 11　有識者会議
2020. 3　基本計画策定（最優先候補地を白馬駅に決定）
2020. 4～ JR東日本長野支社との協議
2021. 4　住民説明会（候補地の見直し）
2022. 1～ 白馬村図書館等複合施設検討委員会
2022. 4～ 官民連携調査（先導的官民連携支援事業）
2023. 4～ 事業費の縮減検討
2023. 9　官民連携による事業実施断念
2023.10～ 財政シミュレーション、施設整備方法、
　　建設実施可能年度等の検討
2024. 3～　子育て施設のみを先行して整備
　　（R7年度着手、R１０年度開設）
　　図書館は一旦先送りとする。

１）教育委員会事務局における検討結果

① 複合施設（子育て施設と図書館）として建設
② 別施設として建設
③ 子育て施設を先行して現在地に建設
④ 子育て施設を先行して現在地の西側に建設

上記４つのプランについて、施設整備や維持管理運営におけるメリット・デメリット、財政的な負担等を比較・評価を行った結果、教育委員会事務局としては、従前の検討のとおり複合施設として整備する①が最も望ましいという結論に至った。

財政シミュレーションにおいても実質公債費比率は他のプランと比べて突出した数値とはならず、これまでの検討において住民から要望の多かった子育てや公園、図書館、交流、居場所等の複合的な機能を有する住民目線の施設整備を行うことで、住民の期待に応えるとともに、効果的・効率的な施設整備や維持管理運営を行うことが望ましいというのが主な理由である。

２）理事者・総務課を交えた財政的検討

前述の教育委員会事務局の意向は理想的であるが、以下の理由により慎重な判断が必要である。

・実質公債費比率が高止まりの状況となることが予想される。

・複合施設整備に約４億３千万円の一般財源が必要となり、全庁的な影響が大きい。（R11は単年で３億円超）

・R13以降からは小学校施設整備も計画している。（合わせて１０億円超の一般財源が必要）

・それに対して、現在の財政調整基金の残高が約１２億円という状況を踏まえると、複合施設整備の場合は、基金を大きく取り崩さざるを得ないこととなるが、近年頻繁に発生する災害発生等への対応を考慮すると基金の取り崩しには慎重な判断が必要となる。

３）最終的な結論

以上の検討から、今後の方針を定めた。

①　現在の子育て支援ルーム西側の農地を取得

②　老朽化している子育て施設のみを先行して整備

③　新たな図書館の整備は一旦先送り

長い年月をかけて検討した図書館建設案を将来的に実現する用地を確保しつつ、後年度に控えている学校施設整備との融合も視野に入れながら、今後の財政状況等により判断していくこととする。

■子育て施設建設事業概要

スケジュール：R7　　設　　計
R8～9　建設工事
R10　　既存施設解体撤去

延 床 面 積 ：約1,000㎡

建設事業費　：約10億8千万円

【内訳】

国庫金等	約３億７千万円
地 方 債	約４億８千万円
一般財源	約２億３千万円

参　　考

【年間】

・維持管理費　約550万円（約55万円）
・運営費　　約2,696万円（約2,300万円）

※（　）円は現在の施設での費用

白馬村キャラクター
ヴィクトワール・シュヴァルブラン・村男Ⅲ世

お読みいただきありがとうございました。